

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「障がい者との壁をなくすために」

南丹市立美山中学校 3年  
寺井萌笑



私には2歳年下に大好きな弟がいる。勉強ができるという訳ではないが、たくさんの特技がある。絵がうまくて、トランポリンでもすごく高く跳び上がる。私は、というと、全然で、弟にはとうてい敵わない。弟には優れている所がたくさんある。

でも、人よりできないこともたくさんある。家の中ならよいのだが、外出した時には困ったことが起きる。目を離しているすきにどこかに行ってしまったたり、欲しいものを買ってもらえないと店の中で大声で泣いたりする。そんな時、周りの目が気になり、「何、あの子?」「うるさいなあ。」と思われているのではないかという気がして、「なんて、こんな弟…。普通の子なら良かったのに…。」と思ってしまう。そんな現実がすごく悲しい。何よりも、家族なのに弟に対して、そんな嫌悪感を感じる自分が許せない。

弟は「自閉症」なのだ。自閉症とは、体は普通に成長するが、他者の存在への無関心や物に興味が強いうという特性があり、コミュニケーションの発達や知的発達に遅れを生じさせたりするので、勉強も他の子どもとは同じようにできないという障がいである。だから、弟は家の外では1人では行動できない。

弟は今、障がいのある子どもたちが通う支援学校に通っている。弟が小学校に進学する時、私の通う地域の小学校に入学させるか、家から1時間以上かかる支援学校に通わせるか、「すごく悩んだ。」と母は言う。最終的には、姉である私の意見も聞くということで両親、祖父母、そして私の5人で相談した。当時小学校2年生だった私は、自分のことと同じように、弟の将来のことを考えた。真っ先に「弟も私と同じ学校になるといい。一緒に通いたい。」という気持ちになったが、「支援学校の方が、弟のためになるのではないかな。弟の将来を考えると、支援学校に行った方がいい人生を歩めるのではないかな。」とも考えた。5人で悩み、考えた末、弟は支援学校に進学することになった。支援学校での弟は、それなりに成長しているらしく、担任の先生と母との連絡帳には、

「今日は、クラスで書き初めをしました。暖君は「とり」と大きく上手に書いてくれましたよ。」

などと、温かい言葉が並ぶ。姉として、弟の成長に大きなうれしさを感じる瞬間だ。

「自閉症」という言葉を聞くと、「普通の小中学校に通っていない。」「あまり話さない。」「何か強いこだわりを持っている。」等、「普通ではない。」ということが頭に浮かぶのではないだろうか。障がい者に対する気持ちは、それが一般的なのではないだろうか。2年前には、神奈川県で福祉施設の入所者が殺害されるという最悪の事件が起きた。障がい者に対する不満や差別意識がエスカレートして、その事件が起こったと言われているが、だからといって障がい者を殺害してもよい訳がない。不満や差別を生きる権利を奪うという行為に結びつけるのは、絶対に間違っている。

私は、「普通ではない」という概念が、障がい者との壁を生んでいると思う。確かに障がい者は、当たり前のことが当たり前できないこともある。だけど、そもそも「普通・当たり前」という概念自体が人それぞれではないだろうか。健常者にとっては当たり前のことでも、障がい者にとって大きな障害となる場面はたくさんある。健常者同士でも、何が普通であるかが異なることもある。それに周囲の人が気づいて支え合い、助け合うことができれば、障がい者との間にある壁はなくなっていくのではないだろうか。障がい者も輝けるものを持っている。私は、弟の身近な存在としてそんな目で弟を見守りながら生きていこうと思う。そして、私一人でなく、社会全体が一人一人を認め合い、個々の違いを受け入れられる、そんな障がい者にとっても健常者にとっても優しい社会を作っていくことを目指していきたい。